

脇野 正博 他

○前嶋 今回のテーマは、コロナ禍と、これからの九州の観光、あるいは交通の展望ということでございます。皆様方には、それぞれコロナ禍でいろいろな影響があったということをお話をいただきましたけれども、実はコロナウイルスというのは今回初めてではないんですね。2003年から2004年に出了したSARS、これもコロナウイルスですし、2013年から乾燥地域を中心にはやりましたMERSですね、いまだに乾燥地域のラクダを宿主として、時々感染が広がっております。

今回は、COVID-19という呼び方をして一新型コロナウイルスとわれわれは呼んでいますが一初めてのコロナウイルスではないわけです。ある意味、グローバル化された観光の裏返しとして、こうした感染がパンデミックを起こしたという性格があります。

日本においては、インバウンドの観光のみならず、日本の観光消費額の8割以上を占めています日本人の観光がストップしたことが、非常に今回の深刻な事態をもたらした結果だと思えます。

今は変異株が出てきておりますし、過去においてもSARSやMERS、今度はCOVIDということで、ひょっとするとまた何年か後には新しい新型コロナウイルスが出てこないとも限らない、そのような時代にわたしたちは入っていくわけです。

われわれとしては、気候変動の中で起きてくる、こうした感染というものをうまくいかくぐりながら、経済活動を復活させて両立をしていかなければいけない。新しい社会生活、ニューノーマルという言い方をされておりますけれども、これに取り組んでいかなければいけないということで、今回はその取り組みもいろいろご紹介いただきました。

皆さま方には、これから、脇野部長、金子市長、田頭町長と順番にお聞きしていこうと思えます。

まず脇野部長、前回の「Go To トラベル」は、去年の7月全国一斉に始まりまして、10月時点ではかなり2019年に近い数字まで戻してきたのですが、その後、非常事態宣言が繰り返し出されました。特に、今回は長期にわたっていることもあって、各県レベルでは、近場の県内観光を、各自治体が施策を作って取り組んでいるということがあります。

それに対して国のほうも、しっかりとした支援を行ってきていると思いますけれども、九州内で、こうしたコロナからの復活に向けての取り組みについて、どういうふうに進んでいくのか、その辺のシナリオや取り組みについて、脇野部長のお考えをちょっとお聞かせいただければと思います。

○脇野 「Go To トラベル」については、昨年開始したときには、ものすごい反響で、それなりに地域の効果はあったのだらうと思います。逆に、それを契機に、一般的に、旅行が感染を地域に広げたのではないかなというようなご意見も多々あって、実際、昨年11月には中止になりました。感染症の収束がなかなか見通せない現状においては、全国規模での移動を前提とする事業の再開、これはなかなか難しいのかなと思います。

そうした中で、今まさしく県レベルで、県内において、マイクロツーリズムを含め、そのような取り組みをしているのですが、それを広げていくときに、まずどういった単位で広げていくかということで、各事業者の要望としては、ブロック単位でやってほしいというご希望があります。なぜブロックかかというと、九州のブロックで見ると、やはり代表圏というか、主要マーケットは福岡なんです。

鹿児島の方が広げてほしいと言っても、近隣となると、熊本、宮崎になるので、そこの人たちが第2マーケットになるかということ、まずなり得ないので、福岡の人を連れてきたい。ただ、福岡となると、まさに感染中心地にもなってい

るので、なかなかそれは難しいかなと言えます。

取りあえず今、政府においては、基本的に近場から始めていこう、近隣から始めていこうというところですが、まだ今のところそれ以上、ブロックを全国的に広げる状況ではないということで対応しているところでございます。

ただ、今後の観光についてですけれども、インバウンドの復活というのは、なかなか現状ではまだ見込めない。おそらく、考え方としては復活するとは言えますが、当面は見込めない状況にあります。その中で、まず観光地、地域において何をすることが課題です。

コロナ前でも、先ほど前嶋さんが言われたとおり、全国の観光消費額の8割、九州はほぼ8割以上が国内観光です。この国内観光において、国内旅行客に対し、感染防止対策の徹底は絶対必要である。そして、安心して旅行できる環境を実現していく。感染防止を徹底した安全・安心、旅のスタイルというものを普及、定着していくことが必要だろうと思っています。

それを踏まえて、全国の感染状況を踏まえながら、まず、国内観光需要の喚起です。地域の観光協会だったり、自治体だったり、DMO（観光地域づくり法人）、そういった方々が地域内の観光資源の磨き上げや情報発信をして、近隣への観光、マイクロツーリズム、そういったものが始まるのかもしれませんが、そこから取り組みをどんどん加速させていくことが必要かと思っています。

当然その間に、インバウンド再開に向けた取り組みも必要になってくると思っています。今まさしく、「Go To トラベル」再開というのは全然視野には入っていませんが、入ってきたときに、どう対応するかという部分も少なからず今の段階で検討する必要があるのかと思っています。以上です。

○前嶋 どうもありがとうございます。まさにそういった、慎重に国内から順番に、段階的に取り組んでいかれるという、慎重な取り組みを

されているということは大変素晴らしいと思います。

第1部で韓国や台湾の事例が出ました。台湾はワクチン接種率が40%台と日本よりも低いのですが、インバウンドをいち早くシャットアウトしたことから、国内観光が早く立ち直れたというようなことがありますし、韓国も同じような状況で、国内観光が立ち直って早く動いたということがあると思います。

日本も早く立ち直れるように、引き続き取り組みをよろしく願いいたします。

○脇野 そうですね。はい。

○前嶋 それでは、次に、金子市長にお伺いをしたいのですが、先ほどのご講演の中で、コロナ禍でのニューノーマルの取り組みをいろいろご紹介いただきました。市長からご紹介いただいた中で、お時間が短うございましたので、これはちょっと手応えがありそうだというような、力を入れられている取り組みがありましたら、詳しくご紹介いただけないでしょうか。

○金子 先ほど脇野部長が言われたように、インバウンドについてはなかなか厳しい見方をしております。国内の特に福岡県内、あるいは九州各県から呼び込もうじゃないかということでやっておりまして、一つは「灯り舟（あかりぶね）」です。灯り舟の運航に際しては、定員を通常の半数以下にしました。そして、貸し切りということにしています。（灯り舟によって）夜の観光の魅力を強化し、滞在時間の延長を図ったところです。

それで実際に、たくさんの方がおいで下さっており、1時間圏内では、前年比で運行数が7.25倍です。そして、1時間圏内からが60%、県内が80%、いわゆる「マイクロツーリズム」というかたちになっております。そういうことで、私たちが思っていた以上に、夜の時間帯の新たな観光である「灯り舟」においでいただきました。

それに修学旅行の誘致です。修学旅行につい

ては、ほとんどが実施できないような状態になりましたが、福岡県内の小中学校に呼び掛けをいたしまして、(2020年の)実績としては県内15校、県外2校の計17校、1,801名の子どもたちが柳川市に来ることができました。内訳は、日帰りが14校、宿泊が3校でした。

今年は、5月2日現在で、34校の申し込みがすでにあります。宿泊が27校、残り7校は緊急事態宣言が解除になれば訪れていただけることになると思います。

インバウンドについてアフターコロナを控えてやっていることですが、一つは、平成28年(2016年)度から外国人受け入れ対応の一つとして、「やさしい日本語ツーリズム」事業を開始しております。これは、おそらく全国で初めての取り組みとして、柳川で進めてまいりました。

外国のお客さまには、「やさしい日本語、おねがいします」という缶バッジを作りました。(川下りの)船頭さんやタクシーの乗務員さんについては、「やさしい日本語の、おもてなし」をいたしますという缶バッジを作しまして、これが好評であります。

それから、いろいろな研修もやっております。(例えば)ホテルの接客をされる方についても、やさしい日本語でお願いしますと。「やさしい日本語」というキーワードは、「はっきり言う」、「最後まで言い切る」ということです。「点点点(・・・)」ではなく、最後まできちんと。日本語の場合は「・・・」が多いのですが、最後まで言う。短く言う。そして、敬語を使わない。日本人は敬語を使いますが、敬語を使わない、方言を使わない。そういうことで、かなり研修をいたしまして、これも結構、柳川方式として紹介をされております。

これまで各国との交流事業やプロモーションでも、コロナ前はトップセールスとして、中国やタイ王国、台湾などにも行きました。一番柳川にインバウンドでおいでになったのは、台湾

と韓国だと思っております。コロナ後には、また仕掛けていきたいと思っております。

私たちが思っているより、現在もずっと(コロナ感染者が)柳川も増えています。「市長、なんか増ゆんね」、「いや、どこでも県内は一緒ですよ」と言うのですけれども。そういうことですので、市長が悪いと言われるのですが、一緒ですよというお話をして。私たちは、柳川に行ったら安心だよとかたちのまちづくりを、これからしていきたいと考えているところです。

手応えのある取り組みとしては、灯り舟と修学旅行の誘致について、インバウンドの誘致ができなかったのも、そういう取り組みをしていたということで受け取っていただきたいと思えます。以上です。

○前嶋 ありがとうございます。灯り舟は非常にいいですね。夏でもやはり涼しい時間帯もありますので。夏は日中の気温が非常に高いので、なかなか舟に乗ろうという気にはなりませんけれども、新しい時期に向けて事業開拓をするという意味では非常によいと思えます。

大学の生徒に柳川の舟に乗ったことあるかと聞くと、「遠い昔、小学校のときに乗った」という子が結構多いんですね。ですので、県内の高校生ですとか中学生、今だからこその修学旅行の新しい取り組みというのは、非常に素晴らしいと思えます。ありがとうございます。

それでは、最後の田頭町長にお伺いします。やはり同じ質問で、筑前町で取り組まれている、コロナ後のニューノーマルに向けての取り組みの中で、これはという取り組みについて、ちょっとご紹介いただければと思います。

○田頭 今はコロナ禍でございます。そういった中で、国から新型コロナウイルス対策地方創生交付金(新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金)というものを配布してもらっています。

この事業名を見たときに、最後に「地方創生」

が入っているんですね。まさにこれは「ピンチをチャンスにきなさいよ」というメッセージだろうと、私はそのように受け止めさせていただいて、職員ともどもこの事業を議論するんです。今までこんなに自由に議論できて、対応できたことはなかったなど。私も役場生活は長いんですが、「こんな時代はなかった、案外、本当にピンチはチャンスなんだよ」と。今、若者からしっかり事業を引き出しまして、「やろうじゃないかと、今ならやれるよと、国がバックアップしてくれるよ」と。

もちろん、大事なことはコロナ対策であります。それは十分やりますけれども、そういった中で、今までやれなかったことが案外コロナ対策になるんじゃないか、アフターコロナが見えるんじゃないか、ということでやっているところでもあります。

一つは、先ほど、「みなみの里」が説明いたしましたけれども、「仕送り便」です。これは非常によく都会と田舎をつないでくれました。人はつなげませんけれども、やはり東京に出ている家族の人が多くいます、うちのまちも。どうしても里帰りができない、孫の顔が見たい。でも、やってこれられないということで、やはり何かを送りたい、今まで以上に「もの」を送りたいんだという気持ちが高まってまいりました。

そこで、ぜひ、みなみの里はから、筑前町の産物を送ろうじゃないか。ただ、野菜を3,000円パッケージしましても、送料が2,500円までかかるんですね。それでは送れないよということで、じゃあコロナ対策としてとして送料をカバーしようじゃないかということでやりましたところ、極めて好評であります。手応えを感じています。

しかしながら、コロナ対策費が切れますと、送料が問題になりますので、ぜひぜひ国のほうでも、こういった送料についての支援をしていただければ、もっともっと都会と田舎というのは近づくんじゃないかということを感じている

次第です。

それから、今までやってきたことをより加速する必要があると思ったことは、住民協働でやる価値が非常に大事だということです。先ほどの「わらかがし」、あれは本当に東京からの、べつにどこかの大学さんが来てくれて作ったものでも何でもありません。地元の方々が、土建業の方がおります、家具屋さんがおります、鉄骨業者もおります。そういった方々が思い立って、熱い思いで、筑前町をもっともっとアピールしたいと、強い気持ちで取り組んでくれました。

それも非常に精度が高くて、クオリティーが高いので、いつもYahoo! ページのトップの写真に出るんですよ。そのことで、筑前町は知らないけれども「わらゴリラ」だけは知っているよという方が出てきまして、本当にうれしいところでもあります。

これで一つ、ふるさと納税でちょっと仕掛けたんですけど、あまりにも有名になりすぎて、さまざまな問題がありまして、まだこれを大いに活用するまでには至っておりません。でも、ぜひ、観光というのは、今まであったものを掘り起こすことも非常に大事なんだけど、新たにつくり上げていくものだというのも、この「わらかがし」作りを通じて思ったところでもあります。

作った人たちは筑前町に誇りを持っているんですよ。田舎という言葉を出すと、われわれ以上の人たちは、田舎もんがという感覚で田舎を捉えがちなのですが、どっこい今の若者は、田舎にプライドを持っています、誇りを持っています。現に人が増えているじゃないかということを私は実感して、「ああ、こういったのがまちづくりなんだよな」と。これに魅力を感じて人がやってきてくれるのだろうと。そして、そこに定住してくれるのだろうと、そのように感じているところでもあります。以上です。

○前嶋 ありがとうございます。「シビックブ

ライド」などの言葉をわれわれはよく使いますが、そこにお住まいの地域の方が自信を持ってそれを進めていくということが大切ですね。中には都市の方や地元から転出された方々もいらっしゃいます。そうした方々がうまく結び付きながら、地域をもう一度復興させていくという、非常によい流れをおつくりなっているのではないかと感じます。

さて、2つ目のテーマは、それとよく関連をするテーマですが、これからコロナが克服されても「人口減少」という避けられない課題があります。現在、福岡市も筑前町も人口が伸びていますが、2040年代になると、福岡都市圏も他の九州各地同様に人口減少に突入していくと言われています。したがって、ニューノーマルの時代を生きながら、われわれは人口減少にも立ち向かっていかないといけない。

そうした中で、国の地方創生政策の第2期(2020年~2024年)においても、地域の外側に住んでいる人たちをうまく地域の経営に役立てていこうという、「関係人口」という考え方が出てきています。(地方創生)第1期(2015年~2019年)の期間中の2016年頃から出てきている言葉です。それが第2期に、今までの観光交流人口だけではなく、移住・定住人口は日本全国で取り合いになりますので、「移住はしなくても、都市に住んでいながら地域を外から支援してくれる人たち」の大切さが、非常に盛んに取り上げられるようになってまいりました。

第2期の地方創生戦略の中でも、全国1,700の自治体の中で1,000自治体以上は、この関係人口の創出事業を目標として取り組んでいただこうというようなKPIも出てきているぐらいでございます。その中で観光が果たせる役割というようなものが、これからはいろいろ出てくるのではないかなと思います。

今度はちょっと順番を変えさせていただきまして、まず金子市長に、最初にお伺いをしたい

と思います。どのような都市との共存や新しい観光の役割をお考えでしょうか。柳川市の場合は60代から、20代、30代の若い方々に広がっていきこうというようなお話をされていたかと思いますが、そのあたりのお話をお伺いできればと思います。

○金子 柳川市市長です。昨年の3月に策定をいたしました第2次柳川市総合計画の後期基本計画においては、「関係人口」の創出について取り組んでいるところです。市外に住みながら柳川に関心を持ち、関わりたいと考えます「関係人口」を増やすことを重視しておりますし、持続可能なまちづくりを進める、定住人口、交流人口、関係人口の全ての方面において、よりよい環境を構築していきたいと考えております。

先ほども申し上げましたけれども、事例として、ふるさと寄附金事業が一気に増えたんですね。昨年度は前年比の4倍以上の伸びを記録いたしましたし、柳川に関心を持っていただく、まちづくりに賛同していただく方、柳川ファンが増えました。いろんなかたちでメッセージもいただいて、「頑張れ柳川」というかたちで、令和元年の1億1,000万円が、令和2年には4億5,000万円近くになっておりますので、これは丁重にお礼の手紙を出しているところでございます。

もう一つ、柳川市は今、「おもてなしの心日本一」という事業をスタートしております。市内の42団体で、「おもてなし柳川」市民会議を設立いたしまして、「できる人が、できることから」を合言葉に、あいさつ運動、清掃運動、親切運動に取り組んでおります。本市の「柳川の観光まちづくり」は、市民が柳川の地域資源を磨き上げて、お客さまをおもてなしすることを共通認識として取り組んでいるところです。

「おもてなしの心日本一」に、なぜ私が取り組んだかということ、九州市長会で壱岐に行き、ちょうど夕食前に散歩をしてると、壱岐の子ど

もたちが見知らぬ私に、「こんにちは」「こんばんは」という声掛けをしてくれたんです。また、女学生たちも声を掛けてくれました。「大変いいな」と、和むような気持ちになりました。

民泊施設に帰ったらおかみさんが、壱岐の子どもたちは、横断歩道で最初に渡るときに礼をして、そしてまた反対を見て、車の運転手に礼をするとおっしゃるんですね。そういうおもてなしの心を持っていますということで、それを聞いてから、柳川市の「おもてなしの心日本一」に取り組みました。

オリンピックは終わりましたが、滝川クリステルさんがプレゼンテーションで、「おもてなし」とおっしゃったそれ以前から柳川市は取り組んでおりましたので、「市長が先やったもんね」と言われます。そういうことで、少しだけ定着をしてきているところでございます。

これからの活動を続ける中で、一つは「道守活動」というものがあります。これもかなり福岡県内では定着をしています。市民が、道をきれいにしよう、川をきれいにしようというようなことと、親切な心で頑張ろうというような気持ちになっております。このことにより、地域外の方々にも柳川ファンが増えることにつながるよう、取り組んでいただいております。アフターコロナを見据えて、これから磨きをかけていきたいと考えているところでもございます。以上です。

○前嶋 ありがとうございます。掘割の清掃なんかも福岡市民が参加できると、つながりができますよね。

○金子 そうです。はい。

○前嶋 次に田頭町長、同じテーマでございませけれども、どのような取り組みが、これからは中心になっていくとお考えでしょうか。

○田頭 「関係人口」という言葉をよく聞くんですが、先ほど、「みなみの里」の館長の福丸が説明いたしましたけれども、「みなみの里」

に年間100万人ぐらい来ていただいております。しかし、これは多くのリピーターなんです。10回、20回来ている人がたくさんいらっしゃるにして、その方々は親しみを持って、より恒常的に、わがまちに来ていただいているということが言えると思っております。

1回の消費額は2千円足らずでありますけれども、10回ぐらい来ていただきますと、1人の方が2万、3万を「みなみの里」で落とさせていただけるということです。そうした経済効果の計算ができるのではないかとも思っているところです。出荷者も売れた分だけ元気が出ますし、近くの福岡から来られた方々もわがまちに親しみを持っていただけるという効果も出ると思います。

そして、「みなみの里」の前には、あえて畑を作っているんです。今の館長が手入れも時々やっているんですけども、そこのナスとかキュウリとか普段の野菜の成長過程を、毎回来られた方が楽しんで見ておられます。

（「みなみの里」に）入場するのに行列ができるわけですが、コロナのために。入場制限をやっていますので、あくまで、一定数以上は入れません。その間、待っていただくんですけども、そこには野菜の生育ぶりをじっくり見られる、あるいは尋ねられるということと、芝生広場には、何と言いますか、草刈りルンバみたいなものを動かしているんですよ。これが極めて真面目に24時間働いてくませて、そうしたのももじっと見つめていただいて、子どもたちはそれを追い掛けようとする。そういったふう待ち時間を大切にしながら、地域のことを知っていただいています。あまりかしこまらず、楽しみながら日常的にわがまちに来ていただいているわけで、こうした人々も「関係人口」なんだろうと私は思っているところです。以上です。

○前嶋 ありがとうございます。そうしたりピーターの方々との取り組みも非常に素晴らし

いと思いますし、先ほどご出身の方々がい
ろんな地域におられて、そこに農産物をお
送りするというのも、ふるさとを思い出
していただいて、外部から支援していただ
くという、これもやはり「関係人口」とし
て非常に重要な人たちでありますよね。非
常に素晴らしい取り組みをご紹介します。
ありがとうございます。

以上のような取り組みをしていただい
ていますが、あちこち実際に見て回ら
れていると思います。心にとまるような
取り組みなど、何かご紹介いただける
ものがありますでしょうか。

○脇野 今、金子市長がおっしゃった
ように、地域市民が一体となって、い
ろんなものを守っていくというのは、非
常に地域としてモチベーションが上がる
し、また、来た人にとっても、「このま
ちすごいよね。この市すごいよね。」と
いう、感情になるし、「また来たいな。」
と感じるのだと思います。

また、田頭町長が言われるように、リ
ピーターが多いという話、リピーター
は何回も来てくれるから、それは何回
も何回もお金を落としてもらえれば、
それはやっぱり、そのまちのファンに
なっていくんだろうなと思います。た
ぶん一度行ったら、ファミリーで来
て、子どもたちがまた連れてくるとい
う、ずっと繰り返し連れてくるんだろ
うというイメージがあります。特に畑
の成長過程というのは、楽しみでは
ない。この時期だと、ここに行くぞ
というような、そういった楽しみも、
年間通じてできるので非常にいい
のではないかと思います。

観光の面での「関係人口」というのは、
なかなか交流人口という中でも難し
いんですけども、リピーターをどう
やって増やしていくかというのが課
題ではないかと思っています。「あ
そこに行くと、いろんな楽しみがあ
るよね」ということで、「水郷川下
り、心和むよね」「やっぱりまた
行きたいよね」という話になりますし、

「ウナギも食べたいし」と言いなが
ら、道の駅でいろんな買い物もでき
るし、草場川の桜並木で夜をゆっく
り散策したいということなど、い
ろんな要素をPRして、リピーター
を増やすことがやっぱり「関係人口
」に広がっていくのではないかと思
います。

特に思うのは、観光観光といって、
いわゆる観光地に来たのではなく、各
地域には産業というのがあって、僕
は観光というよりも産業観光という
か、産業に入っていきようなスキ
ーム作りができないかなと思います。

要は体験型工房みたいなところで長
時間来ていただくとか、陶芸なら陶
芸でいいんですが、その陶芸の土を
こねて焼き上がるまで、ずっといて
もらうとか、そこは行ったり来たり
でもいいんですけど、そういったか
たちで、その地域ならではの産業に
地域外の人に入ってもらって、若
干お手伝いをしてもらいながら、人
が少なくなった中で、全体として地
域の産業がシंकローできればいい
のかなと思っているんです。

ある意味、観光地ではなくて産業、
たぶんこの地域にもすばらしい産
業があったりすると思うんです。そ
こを域外の人にファンになってもら
って、一緒に活動できるようなこと
ができれば、地域としても盛り上が
っていくのではないかと思います。以
上です。

○前嶋 ありがとうございます。まさ
にそのとおりだと思います。産業
というときに、そこに外部から行く
と、産業に携わる人と、人と人とし
て接する機会が必ず生まれますよ
ね。こういった人と人のつながり
みたいなものが、観光地でなく
ても産業を介してつくられていく、
そこが素晴らしいのではないかと
思います。

例えば、イタリアから世界に広が
った「スローシティ」という運動
があります。これは従来のマスツー
リズムには反対という立場をとり
ながら、地域の伝統的な食や産
業を守ろうということで始めた運
動です。生産地の産業を実際に
都市に住んでいる人たちに見て
もらって、

体験してもらって、そこに従来のマスツーリズムとは違う新しい観光が結果として生まれていったというわけです。それによって、「スローシティー運動」に加わっていったローマやフィレンツェなどの大都市周辺の人口減少していた市町村が、人口を回復するというような現象が実はイタリアでは起きています。そういった意味でも、非常に重要なことだと思います。

それでは、一通り2つのテーマについてお話を伺いました。あと、視聴者の皆さま方から幾つかご質問をいただいております。時間の都合で全部はご紹介できませんけれども、お一人1問ずつぐらい、今からお話をお伺いしたいと思います。

まず柳川の金子市長、トップバッターをお願いしてよろしいでしょうか。

これからニューノーマルの観光の中で、体験型の観光を重視していきながら、20代、30代の方々にも取り組んでいきたいとおっしゃっていただきましたが、密を避けながら体験型を進めていくときに、どのようなことに注意をして進めていかれるか、フロアからご質問が出ております。先ほどの「灯り舟」は、密を減らすという取り組みがされているようですね。

○金子 繰り返しになりますけれども、「灯り舟」は大変好評です。まず、屋外であるということですね。それから、乗船者の数も半分になっています。少人数で、特定の人たちと、知った人たち同士というかたちで乗船ことによって、コロナ対策を講じることができるということで、非常に人気があります。柳川市として助成をしておりますので、お手軽な料金で貸切ることができることも好評な理由ではないかと思っております。

また（最近人気がある）グランピングですが、「柳川むつごろうランド」という新しい施設で、キャンプができるようなかたちをつくっておりますので、そこにもおいでいただく方が増えています。

それから、先ほど申し上げた修学旅行についても、今年は早く緊急事態が解除になって、柳川に子どもたちが来てもらえるように誘致を進めていきたいと思っております。

ワクチン接種率も柳川の場合は、高齢者で93%ぐらいまでいっていますので、そういうことで、（観光復活への）意識が高まってきているところでもございます。

さきほど立花宗茂の口上をやりましたけれども、願わくばNHK大河ドラマになれば一気に爆発するんじゃないかと思って、一生懸命、市民の皆さんと一緒に頑張っているところでございます。ゆかりの地が柳川だけではなく福岡県内、九州各地にもありますので、実現できればいいなと、ちょっとわくわくしているところでございます。答えにならないと思いますが。

○前嶋 いえいえ、ありがとうございます。立花家は非常に面白いですね。明治維新のときに、多くの大名が貴族院議員になって東京に行ったりして、領地から離れた方が多いのですが、立花氏は地元で根を下ろし、（戦後の財閥解体や農地改革で財産を失いながらも）料亭旅館として「御花」を開くなど、非常にユニークな活動をされましたね。450年昔から現代まで、そうした歴史を追うと、非常に面白い一族の歴史ではないかと思えます。

それでは、田頭町長にご質問が来ております。桜並木が非常にきれいで、夜桜もきれいですので機会があれば是非訪れてみたいというご意見の後に、福岡市内に住んでいるのですが、福岡地区へのPRや広報活動というのはどのようにされていますかというご質問です。

○田頭 そこはなかなか痛いところでして、マスコミや新聞社を通じて極力記事にさせていただいて、テレビ等でも紹介はさせていただいております。もっと頑張りますので、よろしくお願いたします。今のところ、桜並木についてはそうした手段しかございません。もちろん、パンフレット等は準備しております。

脇野 正博 他

○前嶋 ありがとうございます。私ども中村学園大学も頑張って広報したいと思います。

それでは最後に、脇野部長に質問が来ております。先ほどご講演の中で、観光事業者や交通、あるいは生産に関わる産業、そうした関係者の方々との連携という話が出てきたと思いますが、九州の中でそのような成功事例がもしあればご紹介いただけませんかというご質問です。

○脇野 おそらく資料の52ページのところの、「域内連携促進事業」ということだろうと思います。観光と交通とか、観光と漁業とか、観光と地域の他業種との連携ということになるだろうと思います。

もともと地域の観光は、観光業界と自治体の観光課など、縦レベルで進めていったところがあります。地域には、交通もそうですが、農業、漁業、製造業、いろんなモードがあって、そこが必ずしも今まで連携できていないのではないかという問題意識が、観光庁、国のほうにあります。もっと地域をこう、関係者を一緒にして、一緒に話をして、うまく、こう何だろうな、いろんな人に来てもらうという仕組みづくりができないかなと考えたわけです。

例えば農業で、農業地域に泊まりましょう、経験しましょうという、農泊という形態があります。しかし、そこでは必ずしも、観光業界と一体となった取り組みになってなくて、それぞれが勝手にやっていた傾向が強く、若干無駄があるかもしれないといえるわけです。

その地域の人たちとの連携を強めていくことで、地域の魅力とか、地域の経済など、発展にも寄与するのではないかという流れの中で、今回観光庁が、令和2年3次補正予算事業として募集をしたところです。実際、全国で243の事業が採択され、九州は38の事業が手を挙げて実施していらっしゃると思います。

その中で、何か成功事例があるかというところ、おそらく、まだそこまで成功事例といえるようなものはないのかなという段階です。ただ、そ

うはいつでも、農山間地でいう農泊、古民家関係の事業、それからここにある漁業体験では気仙沼のほうですけれども、わりと非日常をどうやって感じ取るかという部分で、なかなか漁業関係者だけで、そういった観光客を連れてくることはできないので、観光業界とタイアップすることによって、それが可能になるだろうと考えます。

また、農業体験も、なかなか都会では農業に携わることはないので、野菜の収穫などは、収穫時期に来てもらって体験してもらおうというのがよく見られます。ただ農業関係者が、自分たちでそこに人を呼べるかというとなかなか難しく、そこは観光業界と一緒にやっていきましょうということになります。そうした点において、われわれ観光庁としては、「DMO」という地域のマネジメントをする組織を強化して、地域内連携をつくって、地域に人を呼び込みましょうという方法をとっています。それは交流人口であったり、関係人口の拡大につながるのではないかなと思っています。

基本的にどれが今後、成功するというのはなかなか難しいところですが、基本的に成功するのは、その地域内連携がうまくいったところと言っても過言ではないかなと思います。そして、それを域外の人に非日常を提供できる体験というか、そのような魅力あるものをつくっていくところが基本的には成功するんだろうなと考えます。基本的には、また来たいと思わせるような仕組みづくりを地域でどう考えるかということが必要になってくるのではないかなと思っています。以上です。

○前嶋 どうもありがとうございます。

それでは、そろそろパネルディスカッション終了の時間になってまいりました。今日は長い時間お付き合い下さいまして、ありがとうございます。

新型コロナウイルスのパンデミックからニューノーマルの時代へ、われわれがこれから

「地域を活性化させる観光の力」

船出をしていく中で、どのように、われわれの長年取り組んでいる「人口減少」の問題とか、そういったものと関連付けながらも、生産地と都市、あるいはそこに住む人たち、観光に来る人たちとは、有機的なつながりをうまく構築しながら進んでいかなければいけないという、そうしたテーマについて、本日はさまざまご提

案をいただきました。ディスカッションを通じて、課題が見えてきたり、貴重なご意見をいただいたり、非常に実りある時間になったと思います。

3名のパネリストの皆さま方、本日は大変ありがとうございました。